

勝林寺々報

衆生



お釈迦さまのお誕生日です。

お釈迦さまや、お釈迦さまの教えを共に歩む人々のあいだでは、生きものや人間のことを「サツトバ」とよんでおりました。

「サツトバ」というそのことばを、中国では「衆生（しゅじょう）」あるいは「有情（うじよう）」と訳しました。

ですから「サツトバ」というところは、「だれ一人として赤の他人はいないのだ。みんな、如来さまのめぐみのなかで、やがては如来さまの国に生れるきようなのだ。」ということなのです。

「一切衆生悉有仏性」ということも言われます。また、山も川も草も木も、どんなものだっていのちがある、生きよう伸びようとするいのちがある。そういう意味で「山川草木悉皆成仏」という言い方もされておりました。

ようやくと、春も彼岸になつて、谷合いの道などを歩いてみますと、雪のとけたそのあとに小さな小草が萌え出ております。可憐な草花が力いっぱい、しかしつつましく咲き出ています。小草 花々 それぞれは タレカ言フ

春いつばいの かよやきを 寸草ノ心
むくいんとての よろこびぞ 三春ノ暉ニ
報じ得ント

中国の詩を思い出します。
また
「青色ニハ青光アリ、黄色ニハ黄光アリ、赤色ニハ赤光、白色ニハ白光アリ」

如来さまの光をうけて、おのがじし、めいめに、いのち輝いているお浄土の風光を思わずにはおれません。

サツトバ
どんな人も一人として他人はいないのだよ。
みんなみんなきようだい。

如来さまの光をおいで、いのちいつばい輝いて生きようねと、呼びかけられたのが、サツトバ、衆生よとよばれたお釈迦さまのおこころです。

四月八日は、お釈迦さまのお誕生日です。

一年生入学おめでとう

- 岡野 里恵（粟尾）
- 岸下 義孝（保谷）
- 関森 陽介（出合）
- 永井 慎也（矢根）
- 湯口 貴子（榎見）
- 斎藤 すが子（小田）
- 田中 吾郎（小田）

「現在帳」で調べました。ご迷惑がなければ、ご連絡をお願いします。

葬儀

三月六日

日高町

田村 しま子 様

三月二十三日

上小田

浜 新太郎 様

前任職坊守七回忌法要

前任職と坊守とは、昭和十一年就任以来約五十年にわたつて勝林寺を護持いたしました。

前々任職と坊守とが相次いで死去したあと、遺された子女を育てつゝ、さつそく庫裏を新築、戦時下にもまた書院と土蔵を建築。またその間終戦直後に宗門の宗会議員もつとめ、進如上人ご遠忌・親鸞聖人大遠忌も衆にさきかけて勤修しました。

本堂内部の荘嚴のすべてを整備したのもこの前任職の代でありました。坊守はまた、地域婦人会長・郡婦人会長など社会的な活動もさることながら組の坊守会仏婦連盟でも活動しました。坊守はことに晩年長期病におかされ苦しみました。そのなかからも最後まで現任職坊守を育て励ましておりました。

昭和五十六年三月に前坊守が、十月に前任職が相次いでお浄土へ還つていきました。七回忌の法要を勤めます。

四月五日 午前十一時より

私、八十八歳になりました。このごろふと、てすきびに、こんな歌を考へてみました。おわらいください。

近所のきれいな可愛い娘さんがお嫁に行くと聞いて
理知と美ほうに みたされ 育ち かがやきて
今日ぞ こぎ立つ 宝船かな

●午年の孫娘、はねこんまでです。城崎に嫁いで湯の町に ひずめ高らか 駆けて嫁きし
いまも駆けらん しあわせのせて

●最近の心のまます
今ははや のぞむことなし 南無阿弥陀
ただお六字の み名のあるのみ

出石 亀井 ちえ

四月のこよみ

- 二日 永井かめの氏宅四十九日
- 三日 田中重雄氏宅建墓式
- 四日 田中誠康氏宅法事
- 五日 前任職坊守七回忌法要
- 六日 出石組推進委員会
- 九日 玉日会法話
- 十日 出石組念仏奉仕団
- 十一日 出石組念仏奉仕団・光顯寺永代経
- 十二日 清水儀一氏宅法事・光顯寺永代経
- 十三日 正勝講
- 十六日 十六夜会
- 十七、八日 仏婦連盟総会
- 十九日 出石組組会
- 二十日 永井勉氏宅法事
- 二十一日 玉日会降誕会
- 二十五日 浜 明男氏宅忌明
- 二十六日 出石組第六期連研（第一回）
- 二十六日 春季研修会・山田正直氏宅法事
- 二十九日 名古屋宗円寺永代経
- 三十日 同



きまると

勝林寺仏社・仏婦合同の春の恒例行事の日程が決まりました。詳細は追つて連絡します。
今から楽しみにご予約ください。

念仏奉仕団 四月十日・十一日（金土）

出石組の主催です。

ご本山の奉仕と京都御所参観。

大谷本願への納骨式も。

桜の研修会 四月二十六日（日）

午後一仏社ソフトボール大会

午後一研修会「真宗の葬儀」

夕刻より一城社にて観桜会

研修旅行 五月三十・三十一日

目下計画。北陸方面か。

（印）



老いを生きる



「晴八百、偽り、ごまかし、飾りたてて、この七十年世渡りをしてきましたが、とうとう化けの皮がはがれて、ごまかしの出来ない自分を生きねばならなくなりました。それがまあ、八老を生きる」といふことなのでしょう。

お化粧をしたり、帽子をかむつたり、紋付き袴で威厳をつくつてみたり。そうして六十年七十年世渡りして今になつてみたら、もう、そのように自分を飾りたてる気力もなくなつただけではなく、どんなに飾りたててみたところで、それがもう世の中に認めてもらえなくなつてしまいました。

化けの皮がはがれて、自分にも人にも、もうごまかしようのない自分を生きねばならなくなつてしまつたのです。

そうなつて初めて気がついたことですが、ごまかしなしの自分とは、それはいわゆる「三悪道（さんまくどう）」、「地獄・餓鬼・畜生であつた」といふことです。

そうです。からだのうえでも「老人ボケ」。あの姿こそ実はごまかしなしの私の姿であつたのです。

地獄があります。餓鬼のような浅間しいすがたになります。恥も外聞もない身をさらさなければなりません。

八老を生きる」といふことはつまり、そのごまかしなしの三悪道をいきぬくといふことです。だれもが必ず、ごまかすことの出来ない「八老い」をむかえなければなりません。だのに、それを避けようともがいて「中風寺」「ボツクリ寺」へお参りする人もありますが、しよせん無駄な抵抗です。

お釈迦さまのご生涯

豊原 大成先生



南無阿彌陀仏のお念仏は、私のありのままの、その三悪道のなかにこそはたらいいていくべきです。

五濁（ごじよく）悪時悪世界、濁悪（じよくあく）邪見（じやけん）の衆生（しゆじやう）は、彌陀（みだ）の名号（なごう）あたえてぞ恒沙（ごうじや）の諸仏（しよぶつ）すすめたる（「浄土和讃」）

お念仏のなかでわたくしたち、堂々と生きようではありませんか。わたしの三悪道のなかにこそお念仏を聞き、それをよりどころに生きぬこうではありませんか。

悪魔調伏

南から北から流れるニレンセン河から二百メートルほど西に、四方に枝葉をひろげた巨大なビツバラの樹がありました。お釈迦さまは、これこそ修行完成にふさわしい場所だとお考えになり、樹の根もとの東がわに、幹を背にしてお座りになりました。

いよいよ最後の夜、おそろしい悪魔の大軍が、お釈迦さまを修行の座から追い出そうと攻めたててきました。美しい姿の魔女たちもお釈迦さまを

誘惑しました。これらは六年間の修行の間、たえずお釈迦さまに付きまとつてきた心の悪魔であつたのです。

しかしお釈迦さまは、ありつたけの勇氣をもつて、これらの悪魔を撃退されました。お釈迦さまのこのころのはたきは頂点に達しました。このとき、偉大な「さとりの瞬間」が、しずかにおとずれてきました。お釈迦さまは今や釈尊（釈迦族の聖者）・ブツダ（めざました人）となられたのです。

十二月八日の、あかつきの星が、ひととき美しく輝くそのときでありました。

さとりの

「この世のなかにはさまざまの苦しみや悲しみがある。そのなかで一番大きな苦しみが悲しみは、年をとること、死ぬることである。しかし、なぜ年をとる死なねばならないのか。またなぜそれが苦であり悲しみなのか。」

お釈迦さまははしずかに、すばらしい智慧の力でこの問題をお考えになりました。そして「あらゆるものは縁によつて生れ、縁によつて滅びる。この縁起の道理に対する無智こそ、この世のすべての苦しみの根本である」との結論に達せられました。

「人間は、この縁起の真理を明らかに見つけ、その道理に随がつて力いづばい生きて、静かに老い静かに去るべきである。」

これこそ、お釈迦さまが得られた「さとり」であり、これこそ生きとし生けるものが求めねばならない永遠の理想の境地であつたのです。

解脱

さとりを開いてブツダ（仏）となられたとき、お釈迦さまは御齡三十五歳でありました。しかしそれまでの六年間の思弁と修行とは、普通の人間の何十年何百年の人生体験にも相当したことでしょう。

それはともかく、縁起という、世界の根本的な大真理を発見し、それを反復して見つけていかれたとき、人間の様々な苦しみの原因である妄念（もうねん）・煩惱（ぼんのう）の炎は消え（ニルバーナ、ねはん）、人間にまとりつくあらゆる種類の苦しみの束縛から解きはなれた（解脱）、身も心も軽やかに、そして散り乱れず、力に元ちあふれ、しかも静かな喜びがお釈迦さまをつつみしました。このとき天の神々は、美しい花々を降らせ、大

地は歓喜にうちふるえたと、經典には伝えられております。しかし、このような大事件に気づいた者は、すぐ近くのウルベラーの村にさえ、だれ一人もおられません。（つづく）

一門徒総代

私も実は仏式結婚というのは始めてでありました。それで今、大変感激をしてるのであります。

三月一日、ご招待を受けて、寺のご次男様の、その仏式結婚式に参列致しました。もちろん勝林寺本堂は堂内くまなく六色のまん幕が張りめぐらされている中での式でした。式はまず司婚者正福寺ご院家様のお仏前での読経儀式から始まりましたが、これがまたすべて荘重で華やかな現代音楽と男声合唱のなかですすめられたのには驚きました。ついで下陣正面で新郎新婦の「誓いのことば」、「念珠授与」など、わけのわからぬ虚礼的儀式ではなく、いかにもみほとけ様の前でお二人の結縁を誓いよろこぶといつた「実（じつ）」が、私たち参列者にも響いてまいりました。あの面倒な杯のやりとりなどなかつたのも大変いいことだと思えました。とにかくすばらしい音楽が効果充分に流れるなかで、いかさまお念仏のなかの契りの式だと感銘させられたことでした。それに、時間も追いつてられもせず、かといつて長くもなく適当であつたことが一番うれしいことでした。私のうちの孫が大きくなつて嫁をもらうときにはと、もうその時にご院家さんに予約をしたような次第です。（一門徒）

「仏式結婚式に参列して」

念仏奉仕団

いまま少し余裕があります。至急お申込受け付けます。

